

---

夕陽と給水塔とジムノペディ、そしてこの世の果て。

六十一

---

タテ書き小説ネット Byヒナプロジェクト

<http://pdfnovels.net/>

## 注意事項

このPDFファイルは「小説家になろう」で掲載中の小説を「タテ書き小説ネット」のシステムが自動的にPDF化させたものです。この小説の著作権は小説の作者にあります。そのため、作者または「小説家になろう」および「タテ書き小説ネット」を運営するヒナプロジェクトに無断でこのPDFファイル及び小説を、引用の範囲を超える形で転載、改変、再配布、販売することを一切禁止致します。小説の紹介や個人用途での印刷および保存はご自由にどうぞ。

### 【小説タイトル】

夕陽と給水塔とジムノペディ、そしてこの世の果て。

### 【Nコード】

N8329J

### 【作者名】

六十一

### 【あらすじ】

その夏、僕は確かに見たのだ。      この世の果てを。 小学校最後の夏を、地方新興都市“水無瀬市”に生きた少年の記憶。

## 序

「 というように」

英気に満ちた瞳が印象的な男は、講演会場である公民館の段上から、備え付けの椅子に腰掛けた百名ほどの来場者を見渡した。

落ち着いた声で生き生きと弁を振るう男の体からは、漲るような生気が周囲に放たれている。

見た目では、年齢は三十そこそこといったところだろうか。

張りのある声と、いかにも活動的な男の雰囲気がそう感じさせるだけで、本当の年齢はもつと上なのかもしれない。

「もとは同じと思われる遊戯であっても、地方によっては、その遊び方に差異があるわけです。」

この公民館の最大収容人数は二百人程度だから入りが良いとは言えないが、来場した聴衆は、皆熱心に男の話に聞き入っているようだ。

「先のような例をわざわざ上げずとも、幼い頃に引越しをされた方には、ご自身にも覚えがあるかもしれません。引越した先で新たに出来た友達と遊んだ鬼ごっこや、面子、おはじきといった昔懐かしい童遊の数々。これらは土地土地によって遊び方の根幹は同じでも、微妙にルールが異なることがあります。その事にとまどったご経験のある方は、意外と多いのではないのでしょうか」

講演が続く段上の下手には、『水無瀬みなせの遊戯と、その中に見る古来の神々の姿』と書かれた縦長のボードがあった。

そんな、悪い言い方をすれば年寄り好みのしそうなテーマにしては、やけに若い女性の来場者が多いように見受けられるのだが、それは男の容姿が、大いに関係していると思われた。

すらりとしなやかに伸びた均整のとれた体軀は、さながらアスリートのような。彫りの深い鼻筋の通った役者顔負けの整顔に、そしてなによりも強い意志を感じさせる瞳が、男の最も目を引く特徴だ

った。

段上上手のテーブルの上のネームプレートには『深青学園大学考  
古学教授 逢沢裕輔』とある。どうやらそれが男の名前らしい。

「これからみなさまには、ある遊戯風景をフィルムでご覧いただき  
ます。□で説明するよりも、みなさまに実際に見ていただいたほう  
が、遊戯が変容するということのニュアンスをお伝えしやすいと考  
えたからです。

ご覧いただく遊戯は、もとは“はないちもんめ”に端を発する、  
もしくはそれ以前から存在したものが、それに近い形に変容したと  
推測される遊戯を撮影したものです。この遊びはここ、水無瀬市東  
部にある旧村地域で主に遊ばれていたもので、“しよごんさん”と  
呼ばれていました。この呼び方もいくつかあり、時に“ごんずさん  
”とも“しよごんずさん”とも呼ばれていたようです。呼び方は違  
えど、これはどれも同一の遊戯の中の“鬼”の役を指す名前です。

残念ながらもう遊ぶ子供もいなくなってしまい、今日実際にその  
遊戯風景を見ることはできなくなってしまったのですが、運良く、  
と言いますか、私の大学にその遊戯を撮影したフィルムがありまし  
たので、こちらにお持ちいたしました。

当フィルムが撮影されたのは1955年のこと。二次大戦終戦か  
ら数年後、日本がまだ混乱の最中にあつた頃、アメリカにあるミス  
カトニック大学教授“H・ウォルターズ博士”によって記録されま  
した。

なぜ戦後間もない頃の日本の遊戯が、アメリカの学者によって記  
録されたのか、疑問に感じられる方もいらっしゃるかも知れませ  
んなので少し脱線するかとは思いますが、ウォルターズ博士について  
簡単にご紹介しておきましょう。

博士は大戦以前から幾度も日本に来訪されていた親日家で、専門  
は考古学でしたが民俗学に関する造詣も深く、特にここ、水無瀬市  
に伝わる古い伝承や慣習に強い興味を抱いていらつしやいました。  
博士は書物による情報収集だけでなく、実際に水無瀬の村の各地を

ご自分で赴かれ、見聞きし、映像によって記録するという研究方法を好まれていたようで、戦後アメリカとの国交、と呼べるかどうかは分かりませんが……が回復するとすぐに水無瀬市を来訪され、そしてこのフィルムが博士により撮影されたと言っわけです。

今日の深青学園がミスカトニツク大学と姉妹校提携を継続しているのも、博士の御力によるところが大きく、学園の旧図書館　みなさんもご存知かもしれませんが、西の今須山いますやまの山中から学園校舎群と並んで顔を出している、大きな塔状の建物です　にも博士のご好意により寄贈された、世界的に貴重な古文書や文献が多数蔵書されています。

それほどまでに博士は、この水無瀬市と、そこに伝わる数々の民話を愛しておられました。博士の熱心な研究がなければ、現代、目の見ることのなかつたろう水無瀬の伝説も多く、この“しょごんさん”の実際の遊戯風景もその一つと言えるでしょう。

いやはやすみません。博士の話が長くなってしまいましたね、話を戻しましょう　よくゼミの学生にも注意されるんですよ。『先生は脱線が本線になりそうになることが良くありますね』と

小さく上がる笑い声に、男は照れくさそうに頭をかきながら中央から上手のテーブルへと歩き、その上の操作盤で段上中央後方の大スクリーンに映像を映す準備に取り掛かった。

「ともかく一度このフィルムを通してご覧いただいた後、さらにもう一度適時一時停止して解説していきたいと思います。あまり最初からつるさいことを申しますと、せつかくのフィルムに映し出された当時の遊戯風景の味わいを台無しにしてしまいそうですから」

その言葉を合図に場内の照明が落とされ、暗闇にスクリーンだけが白く浮き上がった。目を細めた男の端正な顔立ちが、濃い陰影に彩られる。

「みなさんにご覧いただき易いよう、デジタル処理を施してありますが、何分もとのフィルムの損傷が激しかったために、所々見づらい所、聞き取りにくい所があるのはご容赦を。それでは自分がその

場にいらっしやるように想像して、童心に帰ってご覧になって見てください」

会場の二階にある映写室から伸びた光条が、スクリーンに映像を投射した。

画面中央、青草の生い茂る草原に立つ巨木の根元に、十人程の子供達が集まって、わいわいとはしゃいでいた。

いつからのものとも知れぬ巨木だ。これほど大きくなるのは珍しいだろう、おそらくは林檎の木である。白黒のフィルムでも分かるほどの目も眩む青空が、頭上に広がっていた。

木の下に集う子供達は十歳前後ぐらいだろう。内何人かはカメラが気になって仕方ないようで、物珍しげな視線で、じっとこちら

レンズを凝視していた。他の子供達も、こうしてカメラに撮影されるなどという経験は初めてなのだろう、賑やかにしながらもどこか緊張した面持ちをしている。

「さあ、じゃあみんな、始めてくれるかな。安心して。いつも同じようでもいいのだよ。」

しわがれているものの、はっきりとした男の声。声音はやわらかく、子供達をリラックスさせようとしている意図がうかがえた。おそらくこれが、このフィルムを撮影している人物、すなわちウォルターズ博士の声に違いない。イントネーションに外国人特有の調子が少しみられるが、十分に流暢だと言えるだろう。

その言葉に子供達はほっとしたような笑顔で頷くとその内一人、鶺鴒色の紬を着た、中でも一際目を引く可愛らしい少女が、艶やかなおかつぱの黒髪を弾ませて一団から離れ大木の裏側へと回って行く。と、足元に落ちていた小石を一つ拾う。

カメラもそれとともに、少女が反対側の子供達と、大木を中心に挟んで丁度対称になる位置に移動する。

残された子供達は手をつなぎ、大木の向こう側の姿の見えぬ少女と対峙した。

「竹縷々（たけるる）のしよごんさんに聞き申す。折ごとの捧げ物、どの子がよかるうか」

童謡のような節をつけて、子供達の唱和が草原に広がっていく。

「あの子が欲しい」

少女が返す。小鳥が囀るような声だ。

「あの子ではわからん」

「真司しんじが欲しい」

子供達が問いかけ、少女が答える。

「送りの襷じゃ、いやまたれよ」

子供達の中から、物静かな穏やかな目をした利発そうな少年が進み出た。子供達はその少年を手を合わせて一拝し、大木の向こう側へ送り出す。

「竹縷々のしよごんさん。真司じゃ」

少年の名前は真司というのだろう。真司は大木の向こう側で、木に寄り添うように隠れていた少女に近づき、手を差し出した。しかし少女は恥ずかしそうにうつむいたままだ。カメラマイクの直ぐそばで、堪えきれないといった忍び笑いがする。こちらは博士のものようだ。

真司の背丈は少女と比べて頭一つ高い。真司は困ったような笑いを浮かべて、小石の納まった少女の手のひらに、その上からそっと手をつないだ。

少女は真司の手が触れた瞬間にびくりと小さく体を震わせたが、嫌がる様子もなくうつむいたまま、されるがままになっている。頬がカメラ越しにも分かるほど赤らんでいた。

「竹縷々のしよごんさんに聞き申す。贅足りや否や」

子供達の唱和が再び始まり。

「足りた」

答えて少女の微かに震える声が返った。

「おいおいおい！」

子供達の中の、真司とは対照的な気の強そうな少年が、輪の中から

ら一步踏み出し、大木の向こうに大声を投げかける。

「八重！ それじゃあ続かんじゃろうに、まじめにせんか！」

「正三、そんな言い方もないじゃろう」

その少年の声に怯えたように身を竦ませた少女　こちらは八重  
といつらしい　を見て、真司は宥めるように返し、申し訳なさそ  
うにカメラの方を向く。

先ほどから小さく続いていた博士の忍び笑いが、決壊したように  
噴出し、大笑となった。

「真司の言うとおりだ、正三。八重はまだ小さいのだから、勘弁し  
ておやりなさい」

笑い声交じりに博士に諭された少年、正三は、しぶしぶといった  
感じで輪の中へと戻る。

「なあ八重、もうちよつと兄ちゃん達と遊ぼうな。しょごんさん、  
わかるよな？」

「でもな……もう誰もいらんもん……」  
膝を屈めて八重の肩に手を置く真司に、八重はうつむいたまま答  
える。

「そう言わんで、オルさんも鬼の役は八重がいいと言ってるんじゃ  
し」

「それはオルさんの勝手じゃ」

抗議めいた少女の声を聞いて博士は再び笑う。どうやら博士は当  
時の村では“オルさん”と子供達に呼ばれていたらしい。

「だからそう言わんで、な、八重。オルさんには良くしてもらって  
いようもん」

「鬼かえたらええんじゃ！」

「正三は静かにしとつてくれんかい」

大木の向こうから上がる正三の声に、ため息交じりに真司が答え  
る。

「八重、兄ちゃんのお願いじゃ。たのむ」

真司のあくまで穏やかな物言いに、ようやく八重が首を縦に振る。

「いい子じゃ」

真司が八重の頭をゆっくりと撫でると、不満そうに口を尖らせながら八重の頬がようやく緩んだ。

「またせたのう、みんな。続きをしよう」

子供達に言いながら真司は、カメラの方へ一つ頭を下げた。

「贅足りや否や」

「足りぬ！」

大木の向こうから来た声に返す八重の声にはまだ不満そうな響きが残っていたものの、その後順調に“しょごんさん”は進行しているようだ。

二組にわかれた子供達が歌いあい、子供達の問いに八重が名指しし、次々に“襖”を終えた子供が八重の方へと移っていく。

“はないちもんめ”という遊びは、二つに分かれた子供達がじゃんけんをし、勝ったほうが負けたほうから一人子供を指名して子供が行き来して、適当な時点で終わった時に人数の多いほうが勝ちとなる遊びだが、この“しょごんさん”ではじゃんけんは行われずに進むらしい。

なので最初一人だった八重の方にどんどん子供が増えていく。

“贅”として差し出され、逆側の子供達は当然減っていく。

変化が見られたのは、差し出す側の子供達が、残り五人となった時だった。数にして半々だ。

「足りぬ！」

「贅尽き出せぬ」

「出し申せ」

「出せぬ！」

ただ子供が片側に移動するのでは、遊びにはならない。どうやらこのまま終わるわけではないらしい。

「竹縷々のしょごんさん。聞かずば已む無し。火の神来たりて袂い給え、はいーやーいーやーくーつく！ 大火の御業ぞ、平伏さん」  
差し出す側の子供が歌い。

「待たれ、待たれ。贅をば還さん」

八重の側の子供達が歌い返す。

歌い終わるとそれぞれの組の子供達が集まり、なにやら声を潜めて相談を شدした。

差し出す側の子供達の輪の中では、残っていた正三が中心になり話あっている。正三の顔には意地悪そうな表情がありありと浮かんでいて、正三の提案に子供達は同じような笑顔で頷いていた。

一方、八重の方の輪では真司が中心になっていた。真司は主に八重に何事かを話しかけているが、八重は大きく何度も横に顔を振っている。真司は先程と同じように根気よく八重を説得しているようだ。ほとんど泣きそうな顔になっていた八重だったが、真司の説得に最後は自棄気味に頷き、最初に拾った小石を押し付けるように真司に渡した。

真司は苦笑を浮かべながらも八重の頭を撫でるが、先程のように八重は笑わない。これ以上ないという程不満気な顔をして、今にも大声を上げそうになるのを真司になだめられている。

「きーまった！」

それぞれの話合いが一段落したところを見計らって、正三達が声を上げた。

「竹縷々のしょごんさん。真司を還しゃんせ」

「いやーじゃー！」

あからさまに怒気を含んだ八重の声が、子供達が唱和するのも待たず返される。

「だから八重！ それでは遊びにならんと……」

「いやじゃー！ いやじゃー！」

悔しそうに地団駄を踏む八重と対照的な、してやったりといった表情で、正三はにやにやと笑う。

「還すで待たれ」

八重の側の子供達が返すも、八重は唱和しない。口をへの字に曲げたまま、地面にしゃがみ込んでじつと真司を見上げている。大き

な瞳に滲んだ涙が、今にも零れそうだ。

真司はそんな八重にやはり苦笑で答えながら、正三達の側へ戻っていく。

「還りしぞ皆の衆。真司じゃ」

真司の声に正三達が歌う。

「往きて還る真司。穢れ無き事、証を見せよ」

真司はそれに応えて握った手を正三達に差し出した。正三達目がその手に集中すると、一瞬場が静まり返る。

握った手を真司はゆっくりと広げ 手に握られた小石を正三達に見せた。

「てけりーり！」

勝鬨のように真司が叫ぶ。

「てけりーり！ てけりーり！ てけりーり！」

その声に続いて八重の側の子供達が一斉に叫び始める。どの顔にも笑顔が浮かんでいた。

対して正三の側の子供達はがっくりと頂垂れる。特に正三は歯を剥き出して悔しがっていた。

「一発で穢れかい……どうして真司が穢れとるんじゃ」

残念そうにつぶやく正三には答えず、真司は八重の方を振り向く。どうやら八重の側、鬼の側の勝利らしい。

嬉しそうに笑いあう子供達の中で唯一八重だけは、真司を“還した”時の表情のまま、じつと真司を見つめていた。

スクリーンが暗転し、場内に明かりが戻った。

「短い映像ですが、これでフィルムはお終いです。これが現在唯一残っている、“しょごんさん”の実際の遊戯風景です」

場内をゆっくりと見渡してから、男は再び語り出した。

「先程も申しましたが今ではこの遊びは廃れてしまい、子供の頃実際に遊んだことがあるという方々も、遊び方の細部までは覚えてらっしゃらないということで、完全な解説にはならないのが心苦しい

のですが……これからもう一度、今度は私の解説を交えながら、同じものをご覧いただきたいと思います。

それではフィルムを再映する前に、“しょごんさん”の基本的なルールをご説明差し上げておきましょう」

本当にこういった類の話が好きなのだろう。男の声の弾み具合からそれがわかる。

「遊ぶ際の人数は厳密には決まっていますが、だいたい十人前後で遊ばれることが多かったようです。まずその中から鬼 遊戯の名にもなっている“しょごんさん”です を決めます。フィルムの中ではウォルターズ博士が八重という少女を指定していたようですが、実際はじゃんけん決めてたり、その時鬼をやりたい者が立候補したりと適当です。

鬼が決まったら大きめの障害物、大木や大岩といったものを挟んで、鬼の陣営ともう一つ こちらは“村人”の陣営のようですに分かれ、向き合います。どちらの陣営からも、相手側の子供達は隠され、見えないようになるわけです。

その後、歌によるやり取りで遊びは進みます。村人側から鬼側へ、次々に“贄”が捧げられて行くのですが」

男は一旦言葉を区切り、テーブルに置かれたコップに水差しから水を注ぐと、喉を潤し言葉を続ける。

「ああ、また少し脱線してしまうかもしれませんが、今回の講演の題目と関連するものなので、ぜひともお聞かせしたいことがあります。

この遊戯のもっとも素晴らしい点と言えば、その優れた演劇性にこそあると、私はそう思うのです。

この遊戯の元となったとみられている“はないちもんめ”も、子供の人身売買という悲劇に基いて作られた遊びだと言われていますが、“しょごんさん”はそれを更に推し進めた演劇性を持っているのです。

“しょごんさん”とは実は、童遊びに形を借りた、芝居と言って

しまつて良いと思います。しかしそれこそがこの遊戯を複雑化し、  
廃れさせる最大の要因ともなったのは、皮肉というより他ないので  
すが……。

“ はないちもんめ ” にもととなった話があるように、“ しょごん  
さん ” にも、やはりもとなつたお話があります。

それは“ 水無瀬怪聞録 ” 1720年に“ 相楽慧雲<sup>さからけいづん</sup> ” という人  
物によつて記されたものです。の中にある、『 諸魂の禍、主ノ浜  
の竹を枯らす事 』という話だと思われれます。

水無瀬怪聞録は水無瀬で起きたとされる怪異を集めた古文書です  
が、そこに書かれているこの話の大筋を簡単にお話ししましょう。

昔々“ 諸魂 ”<sup>しよこん</sup>といわれる海鼠のような姿をした禍津神、人に災い  
なす神が、水無瀬村東岸部にある主の浜に流れ着き、あたりに生え  
ていた竹林をことごとく枯らしてしまつた。

更に被害が広がるのを恐れた村人達は、その神に生贄を捧げたが  
一向に鎮まらない。困り果てた村人達の前に旅の行者が現れて言う。  
『 其は“ 諸魂 ” 也。諸々の穢れし御魂の凝りたる神なれば、“ 紅津  
具 ”<sup>く</sup>の御力もちて被うより他無し 』と。

紅津具とは水無瀬で古く信仰されていた火の神の名前です。諸魂  
は海からきた海鼠のような姿の神、海神だと思われれます。つまり碎  
いて言えば、火の神様にお願ひしてお化け海鼠を焼き払ってもらお  
うと、こういうわけです。

それを聞いた諸魂は恐れ慄いて、今まで捧げられた生贄を帰すか  
ら勘弁してくれと村人に持ちかけ、村人は承諾します。

普通の昔話ならここで『 めでたし、めでたし 』なのですが、この  
話には続きがあります。

無事、生贄になつた村人達が諸魂の元から戻つてきたのを喜び、  
村人達はもとの暮らしに戻るのですが、それから村では、神隠しに  
遭う人間が続出したのです。

原因を探してみると、どうやら帰つてきた生贄達の様子がおかし  
い。そこで村人達は、村はずれに滞在していた件の行者の知恵をま

た借りに行きます。事情を聞いた行者は、その帰ってきた村人達は諸魂の変化した姿である、諸魂はどんな姿にも、そしていくつにでも分かれることができるのだと答えるのです。

それを聞いた村人達は、それは一大事と帰ってきた元生贄達を“忌み小屋” 昔の遺体安置所のようなところなのですが 一つに集め、小屋ごと焼き払ってしまうのでした。

物語はここで終わっています。その後諸魂と村人がどうなったかは語られていません。

と、ようやくですが話を本筋に “しよごんさん” のルール説明に戻しましょう 今の昔話をふまえてお聞きいただければ、更に理解が深まると思います」

水無瀬第二公民館所蔵、深青学園大学考古学教授、逢沢裕輔氏による講演『水無瀬の遊戯と、その中に見る古来の神々の姿』撮影フィルムより抜粋。

## ゆっくりと、悩めるが如く。 1

沈み往く夕陽を背に受けて、長く濃い影を小高い丘の上に落とす、古びた給水塔があつた。

その頂に設置された貯水タンク。そこについている梯子で更に上り、日中の苛烈な太陽の熱をたつぷりと帯びたままの、鉄のタンクの端に腰かける。

微かな風が吹く度に鼻をつく、まだ冷え切らぬ地面から立ち上る蒸気に乗って届く青草と、強い鉄錆の匂い。

唇から小さく、細い糸のように漏れ出す口笛は、うる覚えのサテイのジムノペディ。

ゆっくりと、悩めるが如く。

見下ろせば地面は遥かに遠く、落ちれば無事では済むまい。けれどそんなことは気にもならなかつた。

心奪われていた、そこから見える景色に。

そつだ、他の何も考えられないくらいに。

その給水塔の上から見下ろす街の様子は。

まるでこの世の果てのように見えた。

その光景を初めて目にしたとき僕は、あまりに幻想的な有様に息をのみ、まるで魅入られたように目を離せなくなつた。

手前に見える平地に広がる市街地は、夏日の夕陽に照らされ、まるで燃える水の底に沈む忘れられた古代の都市のように見えだし、遠くせり出した峠の向こうに闇に沈み始めた旧村部から、東部に広がる海岸へと続く黒のグラディエーションは、きつとそのまま隔り世につながっているに違いないと。

今よりまだずっと小さな少年だった僕に信じさせるのに、十分な説得力を持つて見えた。

僕はそれを、眺め続けた。

飽きもせず、ただじつと 眼下に静かに身を横たえるこの街が、

すでに失われた古代の都市であるというのなら さしずめ忘れられた都市の王の玉座のようでもある、この給水塔から。

三方を高い山々に囲まれ、東方を太平洋に面した盆地にある地方新興都市“水無瀬市”<sup>みなせし</sup>。

僕が初めてその町にやってきたのは、小学六年生の夏、父の転勤に付き従ったことだった。

転勤といえば聞こえはいいが、父はもともと定職を持たない肉体労働者で、この町に来たのも、偶さかここに長期の建築関係の仕事があつたからに過ぎない。

この水無瀬市にある中高大院の教育機関を持つマンモス校“深青学園”の校舎の一部補修工事が行われるということ、父が数少ない知り合いの建築関係者より聞きつけたのだ。

工事期間は四ヶ月ほど。

僕は小学生最後の夏を、旧体然とした村社会と、急速に発展する市街地とを一つの身の内に内包する町、水無瀬市で過ごすことになった。

その間工事に携わる者の寮として、市街地の外れにある古びた木造アパートの六畳一間の一室が、僕たち親子にあてがわれた。

父と二人で過ごすには、いささか手狭ではあるものの、贅沢は言えない。寮を提供してくれるだけでもありがたいのだ。

転校初日、幾度も父の“転勤”に付き添ったせいで、手馴れてしまった転入手続きを無事終えた僕は、いつものように転校生を物珍しがる、新しいクラスメイト達の視線に晒される授業を終えた。

やはりいつものように放課後に浴びせかけられる、いくつもの質問を素っ気無くかわし、それが終わるとすぐに家にも戻らず、放課後を過ごすのに適した場所を探すために、早速、一人市街地を歩きまわった。

これもいつもの通りだ。

なるべく長い時間を、誰かに咎められることなく、一人静かに過ごせる場所を探す。

それが転校直後の、僕の恒例行事だった。

家にいれば、父と顔を合わせている時間が長くなる。

僕は、父が苦手だった。

父は家にいるときは大概酒に酔っていた。

今思えば、きっと父は焦っていたのに違いない。

安定した収入もなく、これからの展望も覚束ない。更には今からどれほど手がかかるのかも分からない、小さな僕という子供を持ち、途方にくれていのだろう。

それを紛らわせる、つかの間の逃避の手段として、酒が必要だったのだ。

僕はそんな父が 苦手だった。

だから一日の時間の多くを、家の外ですごした。

ならば無理に一人で過ごさずとも、友人とでも遊んでいれば良かったのに、と思うかも知れないが、友達を作るには思いのほかバイタリテイがいるものだ。そしてその気力は、度重なる転校でとくに尽きていた。

いくら友達を作ったとしても、長くて数カ月後、早ければ一ヶ月経つか経たないかのうちに、別れなければならぬ。

出会っては別れ、出会っては別れ。いつしか僕は、友人を作ることを諦めるようになっていた。初めのうちは寂しく思ったりもしたが、回を重ねることにそれは薄れていき、一人の方が気楽にさえ感じられるようになった。

数日が経つと、飽きるのが早い子供達は、誰も僕には話しかけてこなくなった。今回も、これまでと全く同じだ。

僕が誰ともコミュニケーションをとろうとしないことを担任は見えていただろうが、あと半年と少しすれば卒業する時期に入学してきた見知らぬ生徒に、手間をかけるようなことはしない道を選択しようだ。

それでいい 無関心は心地良かった。

誰からも気遣われない分、誰を気遣うこともしなくて済む。

更に数日が経ち、市街地を歩き続けた僕は、ついに自分の要望にぴったりの場所を探し出した。

そこは住宅地の谷間にぽっかりと空いた隙間にある、砂場と、ブランコと、三段階しかないジャングルジムがあるだけの、小さな公園だった。

その公園は僕より小さな子供達しか遊んでおらず、親に連れられてその子供達が帰った後は人気のなくなるような場所だ。

同級生にまわりつかれる心配もない、おあつらえ向きの場所。

僕は学校が終わると、勉強道具の入った手提げカバンを持ったまま、長い時間一人で、その公園で過ごした。

何をするでもなくベンチに腰かけ、ぼんやりと公園の様子を眺め、隣接した家屋からかすかに聞こえてくる生活の音を、聞くとはなしに聞きながら。

小さな子供 幼稚園ぐらいの たちの親が不思議そうに僕を眺めたりする時には、ベンチをたつてしばらく街を回り、その人達がいなくなつてから再び公園に戻った。

長い休みを目前にひかえた夏の日、歩けば汗はすぐに噴き出した。特に盆地であるこの水無瀬市の夏は茹だるようだった。

汗だくの体で、夕闇が包み始める人のいない公園に戻ってきた僕は、がぶがぶと、砂漠を彷徨い歩いた人間のように、備え付けられた水道の水で喉を潤す。

肩口の袖で、ぐいと口元を拭い、また同じベンチの同じ場所に腰掛け、時おり熱気をはらんだ風が、湿った砂場の砂を小さく巻き上げるのを眺める。

平穏だった。

夏の時間はゆっくりと降りる緞帳のように夜を連れて来る。それを予感するかのように公園のオレンジがかかった外灯が、ちかり、ちかりと数回瞬いた後、点灯した。

闇に沈むという逃れえぬ約定を引き伸ばしたいのか、始夏の黄昏は日に日に長くなって行く。赤黒く不吉な夕陽の感触に、不意にえづくように心が揺れる時があれば、小さく口笛を吹いた。

何度か聞いただけのジムノペディを。

ゆつくりと空気に溶けていく不思議に心地よい旋律は、羽毛のように風に舞い、あるかけらは吹き冷まされて重みを増し、絹のごとく地に敷かれた。

心が平穏を取り戻すと、公園の電灯にぶつかると小さな羽虫の音が耳に届くようになり、そして僕はゆつくりと立ち上がり、歩き出す。

酒に酔った父の待つアパートへと向かうために、重い足を引きずるようにして。

それが、幼い日の僕の、全てだった。

やっとのことで見つけたその公園で過ごす日々は、結局そう長くはならなかった。

体調が優れずに学校を休み、アパートで寝込んでいた数日の内に、公園が封鎖されてしまっていたからだ。

やけに久しぶりに感じた学校からの帰り道、いつも通り公園に足を向けた僕が見たのは、工事現場で見かけるような巨大な青いビニールシートを周囲の金網に張り巡らされた公園の姿だった。

「君、ボク、ここには良く来るのかい？」

公園に何が起こったのかもわからず、呆然と立ち尽くしていると、そこに声をかけられ、僕ははっとして振り返った。

「ああ、ごめんな、驚かしちゃったか。おじさんなあ、おまわりさんなんだ」

僕の目の前に、背広を着た壮年の、ひよろりと背の高い男が立っていた。

男は自分が僕を見下ろしていることに気付いたのか、視線をあわせるようにすぐにしゃがみ込み、くたびれた背広の内ポケットから

黒い手帳を取り出し、開いて見せる。

「『私はこういう者です』って見たことねえかな？ ほら、ドラマとかでよくやってるだろう。そこでこいつ、おじさん。どうだい男前に撮れてるだろう？ へっへっへ」

そこに貼られた写真と、自分の顔を交互に指差しつつ、男は笑った。年を経て重力に従順になり始めた目尻が、更に下にぐぐつと下がりがり、なんとも人の良さそうな顔になる。

「読めるかなあ、おじさんの名前。これこう読むんだしのだ こうへい“篠田幸平”」  
名前の欄に書かれた漢字を一字一字指差しながら、一音づつ区切るように男は言った。

「さつきも言ったけどよ、おじさん、おまわりさんやってんだ。おいおい……そんなに緊張しなくていいさ、おまわりさんてなあ“正義の味方”なんだからな」

驚きから立ち直れず、体を硬直させた僕をリラックスさせるように、へへへと軽く笑って男 篠田刑事は、体をゆすってしゃがみ直す。

「なあボク、名前は？ 良くここに遊びにくるのかい？ 学校は……この辺だと“姫ノ宮”かな？」  
きた、と思った。

僕が体を更に緊張させたのが分かったのか、篠田刑事は大げさに顔をしかめて、もう一度へへへと笑って見せた。

「そうだよなあ……いきなり話しかけられてあれこれ聞かれたりしたら、そりゃあびつくりもするわなあ。おじさん、ただちよつとボクに話を聞きたいだけなんだ。ゆつくり、落ち着いてからでいいからよ、まずは名前、聞かせてくんないか」

諭すように笑顔で語りかけてくる男を見ながら、僕はやっぱりな事になったと内心嘆息していた。その後の展開が、容易に想像できたからだ。『どうして一人で遊んでいるのか？』『家はどこなのか？』『帰るなら、送ってあげようか？』

とにかくこの場を早く離れたかったが、この公園で何か事件が起

きたことは子供の僕にすら明白で、そんなことをすれば変に怪しまれかねない。

必要のない面倒事を避けるためにも、僕はしばらく男の話に付き合う事にした。

「茅野<sup>かやの</sup>……<sup>みのる</sup>実です」

途切れ途切れの自己紹介にも、男は安心したように口元をほころばせた。

「そうかい……良い名前だな、どう書くんたい」

なんと説明したものと逡巡する所へ。

「学校の生徒手帳、ないかな？ その方がわかりやすい。おじさん、漢字苦手なんだよ」

思わず頷いた後、カバンを探りながら少し後悔した。なんだか男にいいように乗せられたきがしたからだ。

差し出した生徒手帳を「ちよつと見せてな」と受け取った男は、それを見ながら、別の分厚い手帳を取り出してメモを取り、僕に返す。

ちらりと見えた男の手帳の中には、難しい漢字の文章がびっしりと書き込まれていた。その中に“野犬？”“食い殺す”という文字が見えた気がして、僕は帰りのホームルームで担任が話していた事件を思い出した。

なんでも市内の公園で幼稚園に通う少年が、野犬に襲われて死んだらしい。

『帰るときはなるべく一人にならないように』そんなことを言っていたように思う。ほとんど上の空で聞き流していたので分からないが、もしかしたらここが、その公園なのかもしれない。

「手帳ありがとな。それじゃあ実君。実君は、よくここに来るのかい？」

男の声にぼんやりとした思索を打ち切り、僕は答えた。

「はい……結構きます」

「そうかい、いつもは友達とくるのかい？」

「……たまには」

嘘だ。この公園に誰かと来たことなど、一度もない。

「昨日はどうだい？ 遊びに来たのかな」

「昨日は」

「昨日は」

「今日まで具合が、ちょっと悪くて」

「寝ていたんだ。」

「来てません」

「そうかあ……じゃあなあ、最近この辺りでおかしな事はなかったかい？ なんでもいいんだ、思いついたことがあったら」

「男はなにかを続けて話していたが、ほとんど僕の耳には入って来なかった。」

男は僕に関係の無い人で なにより警官だったから。

「ごめんなさい。わかりません」

何事かを話終えた男に、僕はそう応えると頭を下げた。

「そう……そうかい、ご協力、ありがとな」

男はなにやら悲しそうな顔で、ポケットから今度は、赤いセルロイドの包装に包まれた大きな飴玉を取り出し、僕の手を取るとその上に乗せた。

「こいつはお礼だ」

いきなりのことで少しびっくりしたが、素直にそれを受け取ることにした。子供に飴玉といういかにもなところが、大人というか警察らしいというか。

そのあまりに“らしい”行動を、僕は警戒すべきだったのかも知れない。

「ありがとついで」

言い終わるか終わらないかの内に、男は手を取ったまま、もう一方の手で飴玉を握った僕の腕のシャツを、一気にまくり上げた。

「夏でそんなに汗かいてるのに長袖で 実君……この痣、

どうしたい？ 口の端っこと、そら、首ねっこのところもよ。誰かとケンカでもしたかい？」

年にそぐわぬ俊敏な動きに呆気にとられていた僕は、その言葉に我に返り、男の顔を見つめた。

先ほどまでと変わらない、人の良さそうな笑顔の、目の光だけが違っている。

「子供同士のケンカじゃあ、こっちはなんねえだろうに。……なあ実君、どうしたい？」

まずい。

僕は渾身の力を振り絞って男の手を振り払い、駆け出す。

「おい実君！ どうしたってんだよ。おじさんなあ、この辺にしばらくいるからよ！ 何かあったら交番に來いよなあ。おじさんの名前、覚えてるか？ し、の、だ！ しのただぞ！」

背中当たる男の声に耳を貸さずに、僕は全力で走った。

ただ闇雲に、どこへ向かっているのかも分からなかったが、僕は走り続けた。

頼らない。

警察なんて。

息が切れて走れなくなった後も、僕は歩いた。男が追ってくる気配など初めからなかったが、とにかく少しでも、離れたかった。

どれだけ時間がたっただろう。気が付けば、市街地の外れにある小高い丘の下に立っていた。

我に返って辺りを見渡すと、見知った風景はどこにもない。不安になり、何かにすぐるようふと見上げた視界に、それは飛び込んで来た。

草の生い茂る丘の頂上付近、無数の太い鉄骨が組み合わされ、天に突き出した鉄塔。

その頂に巨大なドラム缶のような貯水タンクが、四方を金網に囲まれて鎮座している。

給水塔。

社会科の時間に写真でしか見たことが無かったが、これほどまでに大きいものだったとは。

貯水タンクのある頂上から地に伸びる梯子を見た瞬間に、僕の中に理由のわからない衝動が湧き上がった。つい今しがたまで感じていた不安は、その衝動にあっさりと吹き飛んでいた。

あの上からは。

衝動が言葉の形をとるよりも早く、僕はここまでの疲れも忘れ、舗装すらされていない丘の上り坂を駆け上がった。

何が見えるのだろうか。

近づいて行く程に、細部を露にしていく給水塔の外観は、それが打ち捨てられたものであることを容易に想像させた。だからそこに行けば、間違いなく一人になれる。

そう思ったのだろうか。

見てみたい。

国語の授業中に教師が余談として話していた、この地方に伝わる民話を不意に思い出す。

『水無瀬には色々な伝説が伝わっています。三啄鳥さんたくどりという巨大な怪鳥の昔話もその一つで』

その鳥が羽を休めるといふ、止り木のように見えたのか。

早く。

それとも、目に入れても改めて認識されることのない、幻のようなその佇まいに、憧れを抱いたのか。

理由は判然としない けれど。

早く。

全力疾走で幾度も足をもつれさせ、転びながらも、泥だらけになった体を引きずるようにして。

そうして辿り着くだけの意味があるものだと、その時の僕には思えたのだ。

果たして それはきつと、正しかったのだと思う。

## ゆっくりと、悩めるが如く。 2

息を整えながら真下から見上げる給水塔は、いや増して大きく見えた。

高さは3、40m、直径20m程の大きさの給水塔は、僕の視界全て、僕の世界を圧倒した。

目を移せば、給水塔から少し離れた場所に、かまぼこ形の建物が建っていた。おそらくそこが給水塔の管理施設になっているのだろう。こちらでも給水塔と同じように塗装は剥がれかけ、周囲の雑草も伸び放題になっていて、機能していそうもないように見える。

その建物と給水塔をぐるりと囲むように、高さ3m程の赤錆の浮いた金網が張り巡らされていた。

同じぐらいの高さの鉄柵でできた出入り口も同様に錆付いていたが、そこにかかる大きな南京錠は、やけに新しいように見えた。試しに引つ張ってみたが、当然外れるはずもなく、僕は逸る心にじりじりと焼かれ、うろうろとその場を歩き回りながら思った。

どうにかしてこの中に入ることはいかなだろうか？僕は恨めしげに金網を見上げた。

3mの金網だ。登ることはそれほど難しいとはいえないだろうが……気になるのはそれよりも、金網の最上部に幾重にも巻きつけられた有刺鉄線だ。鉄の棘を持った茨を連想させる鉄線はいかにも攻撃的に見えて、僕の金網を乗り越えてしまおうかという衝動を抑制するのに、十分な効果を持っていた。

だからといって給水塔へ登ることもあきらめられず、僕は頭上に聳える鋼鉄の玉座を見上げながら、指先を金網に触れさせながら、それに沿って未練たらしくとぼとぼと歩いた。

出入り口から50mほど離れた位置にある金網の、丘の斜面と接する部分に空いた隙間を見つけた時、この厄介な境界線を越えることをほとんどあきらめかけていた僕の心臓は、跳ね上がった。

急いで駆け寄って確かめると、子供一人がなんとか入り込める程度に、金網がたわんでいる。

僕は矢も盾もたまらず、そこに体を滑り込ませた。

途中で服を引っ掛けたりしてしまわないように注意しながら、慎重に地を這いずるように金網を潜り抜け、ついに僕は給水塔施設の内側へと足を踏み入れた。

悪いことをしているのだ、という自覚はあった。が、それを遥かに凌駕する高揚に、僕は服に着いた泥を払うのもそこそこに給水塔の上へ登る梯子へと駆け寄る。

布製のカバンを肩にしつかりと掛け、ざらつく錆の浮いた梯子を登っていく。

いつ僕の行いを咎める誰かの怒声が響くかと戦々恐々としながらも、周りを見回すこともせず、僕は両手両足を動かし続けた。

汗ばんだ手に錆びた梯子はやけに滑った。途中、ズボンで手を交互に拭いながらちらりと下を見ると、想像していた以上の高さに驚いた。思わず目が眩み、慌てて両手で梯子にしがみついた。

早鐘のような心臓の鼓動が治まるまでその場に留まり、もう決して下を見るまいと、あと少しで手に届くところまで迫った頂上部を見上げながら、これまでにも増して足元に気をつけつつ登る。落ちれば、良くて大怪我だろう。

梯子の最後の段に手がかかり、僕は祈りを込めて頭上の鉄の跳ね上げ戸 頂上部の床の一部 を押し上げる。それが通じたのかどうか、大きな鉄の蝶番が擦れ合う耳障りな音をたてて、戸は開いた。

途端に赤光が目を焼く。目を細めてそれをやり過ぎしながら、同色に口を開けた穴の中へ、僕は身を躍らせる。

上がった息を整えながら跳ね上げ戸を閉め、頑丈そうな金網に囲まれた直系10m程の円柱形の、鈍く夕陽に輝く貯水タンクに着いた梯子を駆け上がり、丘の斜面の方角へと歩を進めて。

ようやく辿りついた鋼鉄の頂きから、僕はあの光景を、その日、

初めて目にした。

この世の果て、を。

次の日の授業中も、頭の中は前日給水塔の上から見た景色で一杯になっていた。

それほどまでに僕には衝撃的だった。あの神秘的とすら言える光景の一部分が、自分が普段暮らしている町だとは信じられぬほどだ。いつもの公園が使えなくなり、また別の場所を探し直さねばならないと憂鬱になっていた矢先の幸運に、僕は舞い上がっていた。

当然のように僕は放課後、今度は町外れにある給水塔に通うようになった。

雨の降る日は梯子を上るのが危険なので、流星に止めておいたが、天気の良い日には欠かさず給水塔に登った。

そして日が落ちてしまうまで、目の前に広がる景色に酔い痴れながら過ごした。

もし許されるなら、僕は日中と言わず夜と言わず、その場に留まり続けたことだろう。

なにが僕をそこまで惹きつけるのかは分からなかったが、そんなことなどどうでも良かった。

口笛を吹きながら、巨人の国の玉座に座している時、僕は確かにこれまでに感じたことのない充実感に包まれていたのだから。

僕は“いじめ”の標的とされたいらしい。

またこの学校でも、と付け足すべきだろうか。

それを見つけたのは、給水塔に通うようになってから数日後の放課後のことだ。

男子トイレの小便器の中で、僕のポロポロのスニーカーが、小便まみれになっていた。

給水塔へ向かうために一刻も早く学校を出ようとしていた僕は、自分の下駄箱が空っぽであるのを見て、しばらくその場に立ち尽くした。

その時点で大体の予想はついていた。

ああ またなのか、と。

上履きのままで帰ろうかとも思ったが、そんなことをすれば父に叱られるのは明白で、僕は仕方なく学校の中を探し周り、教室の近くのトイレの中でそれを見つけたのだ。

不意に聞こえてきた押し殺した笑い声に入り口の方を向けば、底意地の悪そうな細い目を更に細めて、顔を覗かせじつとこちらの様子を伺っている少年の姿があった。

おそらく下駄箱のあたりで待ち伏せていて後をつけ、狼狽する僕の様子を見て暗い愉悦に浸っていたに違いない。いろいろと気付いてはいた。

机の中にきちんとしまっていたはずの教科書が、席を外し戻ってきたら床中にぶちまけられていたり、細かく千切った給食のパンが、僕のロッカーの中にはら撒かれていたりした。

誰がやっているのか見当は付いていたのだが、確証は無かった。だからというのもあるが、僕はそんな目にあっても何も言わなかったし、してこなかった。

もし仮にそうした幼稚な嫌がらせを騒ぎ立て抗議したとして、それが一旦解決するとしても、その後控えている厄介事の方が、いわゆる“いじめ”と呼ばれる一連の行為そのものよりも、僕にとっては耐え難い苦痛だったからだ。

今回もそう思った。たかだか靴が汚れただけだ。

だが。

少年は僕と目が合うと、慌てて顔を引っ込めた。おそらくこいつだろうと、中りをつけていたとおりの人間だった。確認はできな

つたが、他にも数人の少年達が、僕の視線を感じて、さっと入り口から顔を隠すのが見えた。

その時思ったことは二つ。

なぜだろう。

それが一つ目。

どうしてこういうことをする人間がいるのか。

僕は覗いていた彼に対して、いや、他のどのクラスメイトに対しても、危害を加えたりしたことはない。

そんな僕にこんなことをして、何の得があるというのだろうか。

転校して、他の学校でも幾度かこうした目にあった。

その度に僕は思い、時には実際に口に出して聞いた。

なぜこんなことをするのか？

生徒達は言う。

暗くて気持ちが悪い、と。

教師達は言う。

もっとクラスに溶け込みなさい、と。

答えになっていない、といつも思った。

そんな的外れな返答を、ぼんやりと頭の中で転がしながら思っていたことがあったが、その当時はそれを明確に言葉にする事はできなかった。

が、それへの対処法は知っていた。

僕の父が僕に教えてくれた、数少ない実生活に役立つ“処世術”だ。

そして二つ目。

こちらの方がその時僕にとっては、より重要なことだった。

多分この二つ目がなければ、僕はその“処世術”を行使することはなかっただろう。

僕は気付いたのだ。

そうだ　この靴が無ければ、給水塔へ行くことができない。

そう思った瞬間、身の内からこれまでに経験したことのない激し

い感情が溢れ出した。

あつという間に僕の頭の中は、その感情に埋め尽くされていく。それに従うことに、僕は決めた。

給水塔から、景色を見たかったから。

こんなことが何度も起きるようなら、その障害になる。

僕は薄汚れたトイレのタイルを思い切り蹴って駆け出した。

トイレを出て辺りを探すと、ケタケタと耳障りな笑い声を上げながら、小走りに廊下を遠ざかっていく四つの少年の背中が目に入った。その中に先程の顔を見つける。他は分からなかった。

ぐんぐんと加速し、背中との距離を詰めていく。まだ少年達は、僕に気付いてはいない。

ふと振り向いたその内の一人が駆け寄る僕を見つけて、わあと大袈裟な声を上げる。あの目の細い少年だ。

他の三人がその声に驚き立ち止まる。彼らが振り向くより早く、駆けたスピードそのままに三人の内手近な一人の背中に大きく飛び込んで、真っ直ぐに膝を突き出した。

緊張していない筋肉の、ぐにやりとした気色の悪い感触が膝から伝わってきたすぐ後、だらしない放屁のような音を口から吐き出して、その少年は前のめりに倒れ廊下をのたうった。悲鳴は聞こえない、息が詰まってしまったらしい。

ちらりと顔を確認するが、違う、と思った。

足首を痛めないように気をつけながら着地し、次に近い一人へ。

低い姿勢のまま突進し、迷い無く股間に拳を突き出す。僕は体が丈夫な方ではない。だからなるべく体の硬い部分で、柔らかい場所を狙うのだ。

喧嘩はしたことがなかった。

直接内臓を叩いたら、こんな感触がするのもかもしれない。経験したことのない感触に総毛立つ。ひゅつと短く息を吸い込んで相手が硬直し、体がくたりとくの字に折れ曲がる。下りてきた頭の髪の毛をつかんで、膝で蹴り上げる。

けれど、どこをどうすれば痛いのかは知っていた。十分に、嫌と言っくらい。

二人目、その少年も違った。

次に目に入ったのは、最初に僕に気付いた細目の少年だが、脇をすり抜け、最後の一人に向かった。案の定僕には何もしてこない。

目を見て分かった。まだ目の前で起きていることを完全に理解していないか、分かっているも体がついていかないか。どちらにせよ“残しておくべき奴”だということが。

最後の一人の姿を捉える。

名前の全部は覚えていないが、今廊下に転がっている少年達が“タカノリ君”とか呼んでいた覚えのある少年。

こいつだ、と僕は思った。すぐに分かった。

『ちっちゃな国の王様』の目をしていたからだ。

自分の世界で思い通りにならないことは、一つも無いのだ、という目だ。

確か空手をしているのだと得意気に吹聴していた記憶があるその“タカノリ君”は、身を低くして飛び込んできた僕に、型通りのきれいな正拳突きを繰り出してきた。

肩口に鈍い痛みが走る。

でもそれだけだった。

僕は両手を腰に回し、抱きつくような格好で押し倒し馬乗りになる。

息を荒げ、僕は聞いた。

「なんであんなことをする」

腰と背中を打ちつけたらしい“タカノリ君”は、息を詰まらせながらも僕を睨み付けてくる。

「うるせえな痛えよ！ きめえんだよお前は！ いつも怪我ばかりしてるし暗いんだよ！」

下から突き出された拳が口元に当り、頭がぐらりと揺れた。

口の中に血の味が広がる。塞がりきらない傷が、また開いたら

い。

“タカノリ君”の答えを聞いて思った。

また、それが。

僕を殴った手が引かれないうちに両手でつかみ取り、肘の下の内側辺りに思い切り噛み付く。半袖で剥き出しの腕に歯は簡単に突き立ち、“タカノリ君”の絶叫と共に口の中に自分のものでない血の味がした。

それに呼応するかのように、周りに集まり始めた野次馬の生徒達も、ぎゃあぎゃああと騒ぎ出す。

「先生を呼べ」だの「もうやめろ」だの。

無責任だと思った。それなら直接自分で止めればいいのに、と。でもそう思いながらも、保身のための計算がちゃんとできるのだということに、どこか関心したりもした。

騒ぎはどんどん大きくなっていった。まもなく教師が駆けつけるに違いない。

わめき続けている“タカノリ君”の鼻に肘を振り下ろし黙らせながら、僕は言った。

「謝れ」

一瞬“タカノリ君”の動きが止まったのが見えた。彼はきつと、その瞬間に葛藤したのだろう。『いじめられっ子に謝って許しを請う』か『王様の地位を守るために意地をはる』か。

迷わせてはいけない。すかさず今度は頬骨の辺りに肘を落とす。

「謝れ」

「いじめんなぞ」

次の反応は早かった。どうやらこの場からとにかく逃れようというところらしい。

よかった。“タカノリ君”は、“ルール”の理解が早い。

しかし僕は“タカノリ君”が言い終わる前に、左耳の辺りを横から殴りつけて言葉を遮った。

そうしなければならぬ。だってそういう手順だからだ。

「何に」

僕の問いかけに訳が分からないといった顔になった“タカノリ君”の頬を張る。

廊下に平手の音が高く響き、見ていた女の子の一人がが泣き出した。そんなに嫌ならば、見なければいいのに。

「何にごめんなさいだ。言葉」

頭の中に、声が聞こえる。

「くづ……ドイレでい……」

流れ出た涙と血でぐしゃぐしゃの“タカノリ君”の顔。

「今日、警察の奴が来たぞ」

「謝れ」

「くづ……くべんだ」

殴る。

こつしなくてはならない。相手に言葉を最後まで出させてはいけない。

「公園で会ったとか言ってたぞ。お前余計な事言ったか？」

「余計な事はするな」

「……くべんぞあ」

殴る。もつと強く。

「何に！」

「くづ……くづ……！」

殴る。殴る。

「謝れ」

「くめんぞあ」

何度も。いくら謝っても。

「お前は馬鹿だ。馬鹿なんだからもつと謝れ」

「……うう……おえ……くぐ」

うめき声しか出せなくて。血か鼻水か唾液か涙か何かで喉が詰まって。痛いのかどうなのかも良く分からなくなっても。

それでも続くんだ。

そういう手順なのだ。

そういう“ルール”なのだ。

「何にごめんなさいだ！ ちゃんと謝れ」

「ぐ……ぐ……」

何に謝っているんだろう。

何度も何度も拳を振り下ろしながら、僕は思った。

お前は。

「やめなさい！」

泣き声交じりの悲鳴じみた制止の声に、僕は我に返って動きを止めた。

馬乗りの姿勢のまま声の方を見上げれば、やさしそうな女の人が、目に涙を溜めて立っていた。

「なんて……ことを」

声が戦慄く。

「自分の子供にまで！」

口元にあてた手が、ロングスカートに包まれた膝が、慄き震えていた。

「先生……？」

「お母さん……？」

目を下ろせば、無残に変形し膨れ上がった顔の“タカノリ君”が、咽喉に血が流れ込込むのが苦しいのか、ごほごほと咳き込みながら、嗚咽を漏らしていた。

僕の体を突き動かしていた赤暗い感情が、潮が引くように去っていく。

僕は振り上げていた手をだらりと垂らし、放心したように“タカノリ君”の上に座り込んだまま、その女性の顔を見上げた。

まるで怪物を見るような目。歪み、震え、怯えた目。

この女の人は、たしか“ナオコ先生”。僕のクラスの副担任。

母ではない。

そんな事を思った。

辺りは静まり返っていた。微かに“タカノリ君”と女生徒のしゃくり上げる声が聞こえるだけだ。

ああ。

僕に残ったのは気だるさとジンジンと響く手の痛みだけ。

疲れたなあ。

ぼんやりと立ち上がり、その場を去ろうと歩を進めると、遠巻きに見ていた野次馬の人垣が左右に割れた。

誰も動かなかつた、駆けつけた副担任でさえも。

一度で終わればいいな、と僕は思った。

まだ僕に付き纏うようなら、何度でも繰り返すつもりだった。多分“タカノリ君”達がいじめを止めるようなことは無いと思っただからだ。

だから続けよう。

『これは他のやつをいじめた方がいいな』と思ってくれるまで

例えば『いじめ仲間の内でも、一人だけ報復を受けないような妬ましい奴』はそういう標的にされ易くなるかもしれない。

それが父が僕に教えてくれた“処世術”。

『人は何時如何なる時も易きに流れる』のだ、という。

いじめられるなら、自分よりいじめやすい人間を作ってやればいいのだ、という。

教師の呼び止める声が聞こえるが、聞き流す。どうせ手は出してこない。

素直に言うことを聞いて事情を説明したとしても、どうせまた明日同じ事を『事情を良く知らない先生方に説明するため』に、話さなければならなくなるだろうから。

それも全ては僕が次の日も学校に来ることができれば、の話だったのだけだ。

小便まみれの靴を履いて、その日も僕は給水塔に登った。

随分時間が遅くなって、ほとんど給水塔にはいられなかった。

でも、夏の夕の湿った空気の中でも、口笛はよく響いて。

給水塔から宙に舞ったジムノペディは、いつしか山彦をともなつて二重奏になっていった。

それがとても、嬉しかった。

そして僕はその次の日から、学校を休むことになった。

## ゆっくりと、悲しげに。 1

父が仕事に出たのを見計らってからすぐに、僕はどこだかの野球チームの貰い物の帽子を目深にかぶると、かばんを手に家を出た。

学校を休んでいるとはいえ、衝動を抑え切れなかったからだ。

転校してきてすぐに町を歩き回ったときに覚えた、人通りの少ない道を通る。目指すのはもちろんあの給水塔。

僕は周りに目を配り、誰にも見咎められることのないよう注意しながら道を進んだ。

僕くらいの年の人間なら、今は当然学校にいるべき時間だからだ。見つかって声でもかけられようものなら、厄介なことになりかねない。

いくらこちらが放っておいて欲しいと願っても、首をつっこみたがる輩はいるものだから。例えば、あの警官のように。

人目を避けるのは意外と簡単だった。

夏の昼、もつとも日が高くなるこの時間。

仕事を持つ人の大半は市街中心部に集中していたし、学生は学校に、家にいる主婦や老人も、ほとんど攻撃と言っていい日差しの住宅地を、好き好んで出歩く者はあまりいないようだった。

それに、僕の道行きの助力となった一つの要因として、いくつかの町を同じように歩き回ったことのある僕が思うに、水無瀬市の住宅地に見られる一つの変わった特徴があった。

人通りの多い大通りから枝分かれする小道が、異様に多いのだ。高い壁に両脇を挟まれたそれらは直線ではなく曲がりくねっており、その上お互いが所々で交わっていて、まるで迷路のようになっている。一本の道幅は、大人二人がすれ違うのに肩がぶつかりそうな程に狭い。なので一見行き止まりに見える所も、近づいてみると曲がり角になっていて道が続いていたりすることが往々にしてあり、それが一層小道の迷路化に拍車をかけているようだった。

放課後の有り余る時間にまかせてそういった小道も歩き回っていた僕は、どの道を通ればほとんど人に会わずに町外れまで行くことができるのかを知っていた。

こんな風に役立つことがあるとは、思ってもいなかったが。

放課後の時間と外れていたが、人通りのない道というのは時間帯にはあまり左右されないようだ。

真上から照りつける夏の太陽の光に晒されているというのに、小道は薄暗かった。

逆に光が強い分、両側に切り立った崖のように聳え立つ、ざらついていたコンクリートや色あせてささくれ立った竹垣、時折姿を現す古臭い土壁等が作り出す陰影は濃い。

その影が溶け出したような小道は、昼尚暗かった。なのに空気がかもるからなのか、大通りに比べて気温も湿度も高く、歩いているとまるで熱帯の洞窟の中を進んでいるような心持になってくる。

それでも僕は、ためらわずに小道を進んだ。

大通りの音は少しも聞こえてこない。小道には黒い霧のように道の先を覆い隠す薄暗がりと、奇妙な静寂があるだけだった。

歩き続けていると、全身の毛穴が開き汗まみれになる。そこから闇が身に染み込んでくるような気がして、僕はまとわり付く湿気を振り払いながら歩いた。

両脇に立つ家々から、わずかに耳元で囁くように、低い電気機器の唸り声が聞こえてくる。どの家のクーラーもフル稼働しているのだろう。地面は大通りのきれいに舗装されたものとは違い、剥き出しの土に平石が所々埋め込まれただけのもので、道の端には雑草が生い茂っていた。

僕は黙々と小道を歩いた。給水塔へと逸る心が、自然と歩調を速めていく。

その矢先だった。

体に鈍い衝撃を受けた僕は、思わず尻餅をついた。何が起きたか分からずに視線を上げると、制服を着た高校生くらいの背の高い少

年が立っている。

「うお、あ！ と、ごめんごめん、余所見してた」

どうやら曲がり角で少年とぶつかってしまったらしい。少年は慌てて僕の前に屈み込むと、僕の両脇に手を入れて軽々と立ち上げさせた。

「大丈夫？ ケガとか平……気」

柔らかい笑顔で問いかけた少年の顔が、僕の姿を見て急速に曇る。

「病院、行つとくか」

「平気です。大丈夫」

背負われそうになり慌てて少年から離れた僕を、少年は心配そうに見つめた。

「平気つて……どう見たつてそれダメだろ。何かあったのか？」

「いいんです……本当に」

「え……？」

納得がいかなさそうな表情の少年だったが、それ以上言葉を続けずにじっと僕を見ているだけだ。

これが嫌だったんだ。

「なら……いいけどさ」

ようやく出た少年の言葉に、僕は心の内で胸を撫で下ろした。

「ぶつかつてすみませんでした。さようなら」

「あ……ちよい待ち！ 君、この辺の子？」

脇をすり抜けた僕の背に少年の声がかかる。まだ何かあるのかといささかうんざりしたが、いつかの警察のように下手に興味をもたれても困る。僕は足を止め振り返った。

「まあ、そうです」

「ああ……良かった。この辺にさ、洋館……えっと、外国の家みたいな見ための大きい家、ないかな？ 相当大きな家だったんだけど、俺ちよつと道に迷っちゃったみたいで、見つからないんだよ。この脇の家が、そうだなあ……10件分くらいある家なんだけど」

道の脇から屋根の覗く民家を指差して、少年は言った。

記憶になかった。おそらく僕は、この辺りの大抵の道を歩いていた。本当に少年が言う程に特徴のある大きな家ならば、当然記憶に残っているはずだが全く覚えがない。

「すみません、知りません。でも」

給水塔の上から見た景色では。

「大きな川沿いになら何件か、すごく大きな家があったと思います」  
「ああ、川沿いの“お屋敷通り”のことなら俺も知ってるんだ。そつちじゃなくて、この辺りのはずなんだよなあ……うん、ありがとう、もう少し探してみることにすつか。あのさあ……お礼に兄ちゃんが病院連れてってやるうか？」

まだ 言うのか。

「いえ、大丈夫です」

「そっかあ……ところで君、学校は……」

「失礼します」

「まあ俺も言えたもんじゃないか」

言葉を遮ってお辞儀した僕に、少年はじゃあと苦笑混じりに手を振った。

それ以降は順調に誰にも会うこともなく、給水塔に辿り着くことができた。

僕はすっかり慣れた足取りで給水塔に登ると、タンクが作る日陰に腰を落ち着け、夕暮れを待った。日陰に身を寄せていても、鉄の床から立ち上る熱気で茹で上げられてしまいそうだ。

体をタンクにもたれさせて、持っていたカバンの中から水道水を詰め込んだ500mlのペットボトルを取り出すと、一口飲み込む。まだ先は長い、最初からがぶがぶと水を飲むことはできない。温い水道水が、その時はやけに甘く感じた。

いつもと違う時間に給水塔から見る景色には、色々と新しい発見

があった。

燦々と照りつける日の光の下では、町を行き来する人の姿がよく見える。夕焼けのフィルターを通さずに見る町の姿は、なんだかとても白々しく見えた。重大な何かを知っているのとぼけているような、伝えなければならぬことがあるのに、知らん振りを決め込んでいるような。

しかし最も驚いた発見があったのは、それからもつと時間が経った夕暮れの直前のことだった。

この施設には、人がいたのだ。

敷地内に突然大きく響き渡ったエンジン音に驚いた僕は、咄嗟に身を低くして、聞こえてきた方向へと目を走らせた。

管理施設らしいかまぼこ型の建物の裏手から白いバンが現れ、出入り口へと向かって行く。

緊張しながら目で車を追っていくと、出入り口の鉄柵の前で止まり、運転席のドアを開けて中から男が現れた。

男はグレーの作業着のポケットから鍵を取り出すと、その鍵で鉄柵に付けられた南京錠を開け、重そうな鉄柵を難儀そうに横へとスライドさせてから車へと戻った。

車が外へ出ると、男は同じように鍵を掛けなおして、丘の下り坂を走り去って行く。

僕は息を潜めて、その様子をじっと伺った。

男は、遠く離れた給水塔の天辺にいる僕には少しも気付いたような素振りは見せなかったが、それでも僕の心臓は、男の車が町の風景の中に完全に溶け込んでしまうまで、飛び跳ねるのを止めてはくれなかった。

出で立ちからしてここの職員なのであろう男　年までは分からなかったが、作業着同様にくたびれた感じのする男だった　に今まで見つからなかったのは、幸運そのものだ。もし遅くまで男の仕事が長引いていたとしたら、いつも吹いている口笛の音で気付かれていたかも知れないし、単純に鉢合わせていたかもしれない。そう

考えると背筋に冷たいものが走った。

けれど僕は、この施設に職員がいたということ、それほど深刻には受け止めはしなかった。これからここに来る時にはもつと気をつけなければと思う反面、気をつけてさえいれば大丈夫ではないかとも思った。

なぜならもうほとんど機能していないようにも思える給水塔に、いつも僕が来るような時間に及ぶまで、仕事が沢山あるとも思えなかったからだ。

ほとんど毎日と言っていいほど給水塔に登っていた僕とニアミスすらしなかった事も、そのことの裏づけになる気がした。

そもそもあの職員の男が、毎日ここで仕事をしているとも限らないのだ。今日は装置や何かに異常がないかどうか、たまたま点検に来ていただけかも知れない。

念のため男が去った後他の職員が残っていないか、離れたところから管理施設の建物の中の様子を伺ってみたりもしたが、埃がべつたりと張り付いた窓ガラスの向こうは何も見えず、人の気配など少しも感じられなかった。

多少は不安に思いながらも、結局僕は給水塔の上に戻り、いつものように心に迫る夕暮れの風景を眺めた。

しばらく“この世の果ての光景”に身を漬していると、その不安はすっかり無くなってしまっていた。体から流れ出る汗と同じように、僕の魂が体からすると溶け出して周囲に広がっていくような、えも言われぬ陶然とした心持ち。

なぜ僕は、ここから見える景色にこうまで心奪われるのか。

順序も説明も無視して言葉にしてしまうなら。

僕はそこに“終わり”を見出していたのだと思う。

ここがこの世の果てならば、そこには当然“終わり”があるはずだから。

その日も山彦は、心地よく耳に届いた。

学校に通えるようになるまでの数日を、僕は同じように給水塔に登りながら過ごした。

昼過ぎに遅い出勤をする酒臭い父を見送り、小道を抜け、給水塔の上から景色を見て過ごす。それは単調で代わり映えのしない日々だったが、僕にとって今まで経験したことも無いほど、とても心安らぐものだった。

「お前、明日から学校に行け」

その父の一言は、そんな僕のささやかな休暇の終わりを意味していた。

また明日から“始まる”のだ。

胃が鉛を飲み込んだように重くなる。しかし僕にはどうすることもできなかつた。

父の言に何も言わずに頷き、僕はその“休暇最後の日”も、当然のように給水塔に向かつた。

僕の楽観的な予想は見事に外れ、職員の男はあれから毎日、施設に通ってきていた。

しかし当つた部分もある。やはりというか男は、僕には少しも気付く様子を見せなかつた。毎日定刻らしい夕方5時少し前には、車で施設を出て行く。

そんな日が続いて、僕も次第に男が施設にいるということ自体を、あまり意識しなくなつていった。

それが悪かつたのかも知れない。

昼過ぎに給水塔の頂上に着いてから一、二時間後、職員の男が車で出て行くのを見ても「ああ、今日は帰りが早いな」ぐらいにしか思わなかつた。

日が陰り、最大の見せ場である夕暮れが訪れる頃。冬の時期ならば完全に日が落ち夜が訪れているだろう時間に、男の車が帰って来た。

舗装のない坂道を、車体を左右に揺らしながら登ってくるバンのライトが道の上で跳ねるのを見て、なんだか無性に嫌な気分になる。この時間に施設に人が来ることなど、今まで無かったことだ。

夕暮れの暗がり、ほとんど見つかる心配は無いようにも思えたが、僕は貯水タンクの影に身を潜ませ、じつと車の動向を伺った。

見慣れた車から現れたのは、間違いなくあの男だ。

男は施設内へと車を乗り入れると、そのまま建物の裏手へと消えた。

車が見えなくなっても緊張は収まらず、視線は男の車が入っていた暗がり、釘付けになった。

こんな時間に何をしに戻ってきたのか。

闇の中から再び男が姿を現した時、僕ははっと息を呑んだ。

男はいつもの作業着を着て、いつもは持っていない大きなズタ袋を引きずっていた。

男がこの施設を出て行った時には、そんなものは持っていないかったように思う。ずっと車の中にあつた物なのだろうか？ もしかしたら施設内の整備に必要なもので、それを置き忘れたので戻ってきた、とかかも知れない。

相当に重いものが入っていると見えて、男は全体重を掛けた前傾姿勢で袋を引きずっていく。

広い間口の施設正面入口に辿り着くと、男は袋を足元に放り出し、ポケットから取り出した鍵束の中の一つを使い扉を開ける。

その時僕は、確かに見た。

入口に灯った照明の作り出す輪から、暗闇に半分ほどはみ出た地面に転がったズタ袋が。

もぞり、と波打ったのを。

入口をくぐりかけた男もそれに気付いたようで、扉を開け放したままぴたりと動きを止め、視線を袋に落とした。

まただ。袋が。また。

足元で巨大な芋虫のように時折のたくる袋を、じつと声もなく見

下ろしていた男は、しばらくすると袋をそのままに、建物の中に入っていた。

何を、しているのか。

時を待たずして戻ってきた男の手に、土木工事の現場でしか見られないような両手持ちのハンマーが握られているのを見ても、その時何が起こきようとしているのか、僕には把握できなかった。

それは男がハンマーを重そうに肩に担ぎ上げた時も同じで、音は、ここまでは届いてこなかった。

赤い、赤い夕陽を、鈍く黒光りする鉄頭に煌めかせて振り下ろされたハンマーは、ズタ袋の丁度真ん中辺りに深々と食い込んだ。袋の両端が一度大きくくの字に跳ね上がり、萎れた植物のようになりと落ちる。

給水塔の上には、風の音だけが聞こえていた。

ハンマーをその場に投げ捨て、ズタ袋を引きずって男は建物の中に消えた。

後に残された墨汁に漬した筆で乱暴に引かれたような、夕焼けにむしる黒々として見える染みを見れば、いかに遠く給水塔の頂上からであろうとも、それが何を意味するのかは分かった。

それは、あの袋の中に何か“生き物”が入っていたのだという事と、それだけの大きさを持つ生き物の種類は、大自然に包まれた地方都市といえども、かなり限られたものであること。そして最も重要なのは、あの袋の中にいた“生き物”は、おそらくもう息をしてはいないだろうということだった。

そこから導かれる結論の一つが頭の隅を一瞬掠め、僕はタンクに背をもたれさせながら、ずるずるとその場に座り込んだ。

金網越しに町がいつもの色に染まっているのが見えた。今このタンクの上に登れば、あの心揺さぶる光景が広がっているのに違いはない。

しかし、全くそんな気にはなれなかった。

燃えるように熱を帯びていく頭とは逆に体には寒気が止まらず、

ぶるりと体を震わせたのを口火にがたと全身が大袈裟に震え出し、止まらなくなる。必要な酸素量の計算を間違えた脳が、肺にもっともつと呼吸を強制した。

強い眩暈を感じた僕は、座っていることさえままならなくなり、鉄の床にくたりと体を横たえた。

鉄の床のほとんど異臭とすら言える鉄錆の匂いが、鼻腔に充満する。こめかみを滑り落ちた汗の珠が目尻から下まぶたをねぶるように伝い、鼻の柱にひっかかってだらしなく崩れる。

目の前を、どうやってここまで登ってきたのか一匹のアリが、触觉をぴくぴくと震わせながら横切っていった。

一体どれほどそうしていたのか、呼吸が元通りになっているのに気付いた時、アリはもういなくなっていた。もしかしたら少しの間、気を失っていたのかも知れない。

べつたりと鉄の床に張り付いた右耳に、規則正しい音が響いてくるのを聞き取って、僕は勢いよく起き上がった。

再び速まっていく呼吸を感じながら耳を澄ます。

聞こえる。ほぼ等間隔で、鉄の棒を叩くような音が。

誰かが、給水塔の梯子を登ってきているのだ。

誰が？ そんなの決まっている。

僕は這いずるようにして、タンクを挟んで梯子の反対側の位置まで、音を立てないように細心の注意を払いつつ移動した。

足音は徐々に、だが確実に大きく、近くなっていく。

絶対に見つかるわけにはいかない。

もし見つければ、のたうつスタ袋の中の生き物のように。

鉄の床についた引き上げ戸を、下から乱暴に押し開ける大きな音がタンクの向こう側から響き、あまりの音の大きさに声を上げそうになるのを寸でのところで堪えた。

続いてどちゃりと、水気をたっぷり含んだ何かが床に投げ出される音が続き、それが何であるのかを想像を巡らせる度、全身に怖気が振るう。

タンクのすぐ裏側で震えている僕に気付かず、足音は軽快な音をたててタンクの上部へと登っていく。

誰なのか確証は無いが、状況から考えてあの男しか考えられない。しかしなぜ、今日に限って？

たまたまタンクの点検日だったとでもいうのだろうか。

僕の頭上、もたれたタンクの上から、錆び付いた金属をひっかくような音が聞こえてくる。タンク上部の開閉バルブを回す音だろう。それに混じって他の音、いかにも機嫌の良さそうな鼻歌も聞こえてきた。

「さーあお姫様！ お食事の日ですよー。楽しみに待っていてくれたかな？ 今日ほねえ、ご馳走を持ってきたんだよ。と、言ってもいつもと同じだけどね！」

上ずったような猫なで声と、ひいひいという呼吸困難にも似た笑い声。中年の男の声だ。

僕は、狂人と相対したことはない。

が 分かった。

この男は狂っている。

語尾にこびり付く粘液のような狂気の響き。

爛れた皮膚を掻き毟るような不快な昇華の開き直りが、男の声音にはつきりと伺いしれた。

一際大きい栓の抜けるような音がそれに続いて、鉄錆の臭いを何倍も強くしたような強烈な臭いが辺りに漂う。

「おやおやーもう起きてたのかい？ そこに置いてあるから、お父さん今もってくるからね。少しだけ我慢するんだぞ」

臭いは周囲の空気を丸ごと変えてしまうほど濃密なものだったが、僕は混乱して、それどころではなかった。

誰に話しかけている。

男の言葉は明らかに自分以外の“誰か”に対して向けられたものだ。

しかし、この場にいるのは僕と男の二人だけ。男はまだ僕に気付

いた様子はない。ならば独り言ということになるはずだが。額から流れる汗が頬を伝うに任せて、僕はゆっくりと顔を横に捻った。

夜が訪れようとしていた。

どれだけの月日が流れたのか、昔は白く輝いていたのだろうタンクの塗装は、今や干からびた大地のようにひび割れ、ささくれ立ち、斑に剥げ落ちていた。

「お待たせ。ご飯の時間でーす！ さあ召し上げれ」

いくつもの大きな石を沼に投げ込むような音が、何度も何度もタンクの中で響き、僕の耳にまで届く。

そんな、まさか。

おずおずと手を伸ばし、タンクの表面に触れる。灰のようにさらさらと剥がれ落ちる塗料。指先は震えていた。

ここに。

「おつとまだまだ、ご飯の時には何て言うんだっけ？」

そんな。

「いただきます。お父さん」

聞こえてしまった。

確かに、それは男の声ではなく。

小さな、女の子の声で。

はい、どうぞ。嬉しそうな男の声が聞こえた。

猛暑なんだそうだ、今年は。

担任の教師が朝のホームルームで言っていたのだ。

熱中症に気をつけねばならないくらいに。

それなのにこんな、朽ちかけた給水タンクの中に。

「よっぽどお腹が減っていたのかな。誰もとりやしないよ。そんなもの」

そんなもの、のくだりにだけ異様な冷たさがこもっていた。

落ち着け。落ち着け。

呪文のように繰り返し返したが、とても無理だった。

確かに聞こえた。少女の声だった。

どこから？ このタンクの中からだ。

今日一日、僕が来た昼過ぎからは、タンクに人が出入りした様子はない。

様子は無い。ではない。僕はほとんどずっとここにいたのだから。それは絶対に、なのだ。

認めたくない。

ならば、このタンクのなかの少女は？

中には水が入っている。水音を聞いた。炎天下、密封されたタンクの中は一体どれくらいの温度になる？

“食事”をしている？ 何を？ このタンクの中で？

一体いつから、どうやって、どうして？

合理的な説明がつかはすがない。

それでも僕は必死に探した。貯水タンクの中にいる娘に、開口部から『食事』だという何かを投げ入れて与える父。その理由を。

だが次の瞬間に耳に飛び込んできた音に、頭の中が真っ白になってしまい。それ以上は混乱すらすることが出来なくなってしまった。

それは言葉ではなく単純な音。

風に乗る、高く、かぼそく、掠れて、連なっていく音。

ああそれは 口笛だ。

ジムノペディ。

いたのだ。

いたのだ、ずっと。

僕が給水塔に登る度に、気の趣くままに繰り返した。

ジムノペディ。

ずっと聞いていたのだ。

一筋の光もない闇の中で、同じ色の水に身を浸しながら。いつからだったかは覚えていない。

ある時気付いた、僕の口笛に追従するように控え目に耳に届いた二重奏は、こんな低い丘で聞こえる“山彦”なんかであるはずも無

く。

“少女”だったのだ。

一日の内ほんの少しの時間、外から聞こえてくる口笛の旋律を覚えてしまう程の長い間、このタンクの中に。

吐き気がした。

どうすればこんな環境で生きていられるのか。

嘘だと思いたかったが、口笛は続いていた。

少女、それも声からして僕よりも幼い少女に、こんなひどい環境が耐えられるはずがない。

出来るといっているのであれば それは人ではない。

少女の声を出す、“何か”だ。

暮れ行く丘の上をたゆたう旋律。それ以外の全ての音は、この世界から締め出されて聞こえない。

ゆっくりと、悲しげに。

奇妙でやさしい旋律は、男の声に不意に途切れた。

「何だ、それは」

底冷えのする、嫌な耳障りには覚えがあった。

男は、怒っているのだ。

「おしえてもらったの」

男の声の調子が変わったのに気付いていないのか、動ずることも無く、少女の声は平然としていた。

「まさか……お前、ここから出た、のか？」

「ううん」

「じゃあどうやって!？」

「ええとね」

「まずい。」

「まずい、まずい。」

「逃げなくては。」

地上数十mを超える高さにある金網に囲まれたこの場にある唯一の逃げ道。梯子へと続く跳ね上げ戸に視線を向ける。

ちょうど裏側にある戸はここからでは見えない。

そこまでタンクの上にいる男に気付かれる事なく、辿り着く事ができるだろうか。

「だいじょうぶだよ」

出し抜けにタンクから響いた少女の声に、それがまるで自分に向けられたものであるかのように思えてどきりとする。

「大丈夫なものか！　どんな奴だそいつは！？　ここに、来たのか？」

考えている暇は無いようだ。僕は音をたてたりせぬよう気を付けながら、じりじりと数cmずつ、体をずらすようにして進んだ。

直径10m程のタンクの反対側までの距離が、まるで永遠のように感じる。

何度もハンマーを振り下ろされたズタ袋の跳ねる光景が頭の中でフラッシュバックする。

「おい、なにしてる？」

見つかった！？

僕は身を竦めて固まった。こめかみの辺りの血流の音が聞こえてきそうだった。

「おいおいおいおい、出てくる気か！？　だめだだめだ！」

出てくる？　出てくるって？

荒くなつた息が聞こえないよう両膝を抱え、手が白くなってしまふほど強く握つたかばんに顔を埋める。

「お前は……お前達はいつもそうだった！　いつもいつも！　お父さんの事を馬鹿にして言うことを聞かない！」

ドン、とドラを鳴らすような音がタンクを伝い背中を揺らす。男が足を踏み鳴らしているのか。

「そりゃあ頼りないお父さんだろうさ！　ドジばかりで、お前とお母さんはそれを見ていつも笑ってたもんなあ。それでもなあ。それでもお前達を愛してたんだ！　お前達だってそうだろう……本当はお父さんのこと好きだったんだろう……知ってるぞ！」

突然ヒステリックに、男は訳の分からない事を叫び出す。

「あの旅行だつて……名誉挽回のはずだったのに！」

裏返った声が途切れるたび、男の獣のような唸り声とタンクを打ちつける音が重なった。

「それが……それが！ どうして！ あんな！ ことに！」

タンクから伝わる衝撃が、背から腹にじわりと広がる度に、胸の内の焦りが高まっていく。

「びっくりしたよ……お父さんなあ、旅行に行くために仕事を詰め込みすぎてさあ、疲れてたんだ……でも信じてくれよ、あれはお父さんのせいじゃない。お前も見てただろう？ お父さんはちゃあんと左側を走ってた、それは絶対だ。そりゃあ少しはスピードを出していたかも知れないさ。だってお母さんが海沿いをドライブしてから行きたいって言うから……ものすごい遠回りになるんだぞ？ 日暮れまでには市外のホテルに着きたかつたんだ、ほんの少しぐらい仕方ないだろう？」

男の声に、いつしか嗚咽が混じり始めていた。

「悪いのは相手の方だよ……裁判だつて勝つたんだから……完全に車線をはみ出してどのくらい出してたと思う？ 下は断崖の急カーブなんだぞ！ それを100kmだよ！ 100km！ 正気の沙汰じゃない！ 案の定その自殺志願者そのまま海へ真つ逆様。望みがかなってそいつは良かっただろうが、巻き込まれたこっちはたまったものじゃない！ お母さんの首は折れちゃうし、お前なんかお転婆だからさあ……フロントガラスを突き破つてさあ、崖下の海に飛び込んだもの」

男はそこまで言うと、今度はケタケタと壊れたおもちゃのように甲高い声で笑う。

「信じられなかったよ、そうだろう？ ほんの数秒のことだもの。笑つてたろう、珍しく機嫌良さそうに。さっきまで！ ついさっきまでさあ！」

狂つてる。

男は頭の中に浮かんだことを、ただわめき散らしているだけだ。そんな男の声に追い立てられるように、僕は再び這い進んだ。立ち上がり駆け出したくなる衝動を何度も抑えながら、ゆっくり、ゆっくりと進む。

べつたりと汗の滲んだ手のひらに、鉄床の錆が砂利のようにまとわりつく。

「でも見つけれちゃったよ。お父さんすごいだろう？　こんなぼろいタンクの中に隠れてたなんて、誰だって気がつかないよな。わが娘ながら本当に呆れるよ」

再びひきつけを起こしたのかと勘違いしそうなほど笑いこける男の声。こちらまでおかしくなってしまうような声だった。

タンクの脇に、ついに跳ね上げ戸の端が見えた。

僕はかばんを胸に引き寄せて逡巡する。ここからなら駆け出しても大丈夫かも知れない。しかし戸を開けた後梯子を降りることを考えると、このまま見つからないようにゆっくりと進んだほうがいいのか。

どうする。どうすればいい。

男はまだ終わりの見えない狂笑に身を任せていた。多少の物音には気付きそうもない。

僕は、一か八か一気に戸に駆け寄ることに決めた。

あらためて跳ね上げ戸に目をやる。距離は数メートル。なんとなく幸運か、戸は上げられたままになっていた。これならばスムーズに梯子に辿りつけるだろう。

かばんを肩にかけ直し、手について腰を浮かせた姿勢で駆け出そうとして、僕は身動きが取れなくなった。

跳ね上げ戸から覗く梯子に目をやった視界の隅に。

タンクの脇から半分だけ顔を覗かせて、屈んだ僕を見下ろす目があつた。

顔を上げた僕と真正面から視線がかちあつと、その“少女の顔”は、覗かせた半面だけで目を細め、笑顔を作った。

顔の造作だけを見るならば、十分に可愛らしい少女と言って良かっただろう。

細くやわらかな眉に、くっきりとした二重の大きな瞳を縁取る睫毛は、眉とは逆に濃く、しっかりとしていた。小鼻はすっきりとして、その下に小さくぽってりとした唇が、つつましやかに咲いていた。

少女は恥じらいの表情を浮かべて、タンクの脇から、僕の目の前に姿を現した。

「ねえ」

鈴の音のような声で囁きかける少女の口元は、血に塗れていた。

そして。

見てはいけない類のものが、この世には確かにあり、そして自分の目の前のそれが、まさにそういったものの中の一つだった。

「ねえ」

少女の顔の下には、当然続くべき体が無かった。

あるのは肉色の大蛇のようにのたくる、長い長い首だけ。

それはタンクの横腹を伝い、上部へと消えていた。

僕はタンクに視線を移す。この中で、とぐるを巻いているのか。

「ねえ」

三度目の囁きは近すぎた。

吐息が頬にかかり、血の臭いがした。

「きょうは、くちぶえはなし？」

「あ」

耳朶を打つ良く知った調に、咽喉の奥から掠れた声が漏れる。

ひび割れ、崩落するダムから噴出す水のように、様々な感情が激流となって流れ出し。

僕は絶叫していた。

叫びとともに大切な何かが流れ出して行く感覚。

暗度を増していく世界とは裏腹に、視界は白く染まっていく。

そして旋律だけが残った。



## PDF小説ネット発足にあたって

PDF小説ネット（現、タテ書き小説ネット）は2007年、ルビ対応の縦書き小説をインターネット上で配布するという目的の基、小説家になるうの子サイトとして誕生しました。ケータイ小説が流行し、最近では横書きの書籍も誕生しており、既存書籍の電子出版など一部を除きインターネット関連に横書きという考えが定着しようとしています。そんな中、誰もが簡単にPDF形式の小説を作成、公開できるようにしたのがこのPDF小説ネットです。インターネット発の縦書き小説を思う存分、堪能<sup>たんのう</sup>してください。

---

この小説の詳細については以下のURLをご覧ください。  
<http://ncode.syosetu.com/n8329j/>

---

夕陽と給水塔とジムノペディ、そしてこの世の果て。

2010年12月31日13時25分発行